スクスク伸びろ 悠木の里。

阿蘇郡小国町

悠久の年輪を刻む小国杉。悠々と噴き上げる地熱。

悠然たる阿蘇小国郷の大自然――。

県下各地の日本一づくり運動と、

そこに集結するエネルギーを

ご紹介するこのページ。

第1回目は、この4月ユニークな

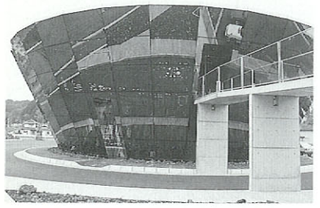
バスターミナルの完成で

話題を呼んだ、小国町。

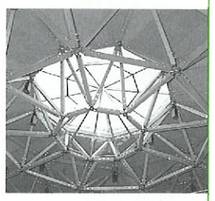
噂のターミナルをはじめ、「悠木の里」づくりに燃える

町の様子をご紹介！

小国町と言えばコレ！すっかり有名になったシンボル〝ゆうステーション〟



小国特産の小国杉をふんだんに使って造られた交通センター〝ゆうステーション〟は、この4月に完成したばかり。そのユニークなつくりと外観は、マスコミでも盛んに取り上げられ、名実ともにすっかり町のシンボルになってしまった。小国杉の平均10cm角の角材約2,500本を特殊な円形ジョイントで三角形に組み合わせた立体トラス工法。逆円すい台の全形とミラーガラス張りの建物は一見の価値あり。



「特産品を育てる場にしたいですね。このステーションはこれからの林業に夢を与えるし、町のPRにもなる。それが町の誇りと自信になれば―。とにかくたくさんの人に気軽に訪れて欲しい」と語るのは、〝町民プランニングシステム〟の一員山田大蔵さん。

交通センターに続いて、同じく小国杉を使った工法で、林業総合センター、町民体育館も建設中だ。

北里柴三郎先生のようなエラ～イ先生が、また出るかも。明日の人材を育てる〝学び舎の里〟

北里柴三郎博士生家

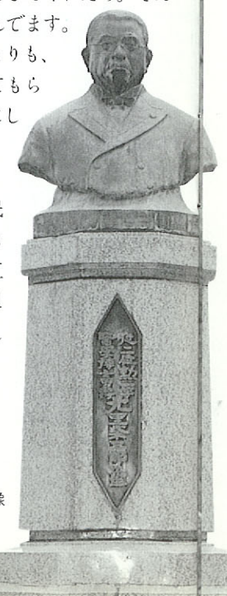
小国町は、ご存知、あの世界的黴菌学者、北里柴三郎博士の生誕の地でもある。先生の生誕地・北里地区では、いま記念公園と一体化した〝学び舎の里〟づくりがすすんでいる。

北里文庫

現在、整備が終わっている記念公園や記念館のほか、目玉となる研修施設〝木魂館〟をはじめ、木工房、集会所、オートキャンプ場なども計画中。

「ここで育った人で、将来小国の地域を背負う人が出てきてくれたら。そんな思いで取り組んでます。他から訪れる人よりも、地域の人に訪れてもらえるような場所にしたいですね。」

この学び舎づくりにかける〝町民プランニングシステム〟の一員、江藤訓重さんと北里康二さんは、そんなふうに語ってくれた。



北里柴三郎博士銅像

エネルギーが人を呼ぶ。この町に魅かれて、ついに住みついてしまった人も……。

菊池さんご一家

エネルギッシュな町には、そのパワーに引かれるように、いろいろな人が集まってくる。草木染をやっている菊池芳雄さん、木工の家具をつくっている葛城弘治さんのお二人も、そんな移住者の方々。

東北出身の菊池さんは、昨年この小国町で草木染の講習会を開き、すっかりこの町に魅せられてしまった。

「とにかく、この町のエネルギーはすごい。今、まちは上昇している。」と語る菊池さん。目下小国杉で染める小国杉染めに挑戦中。

また、大分生まれで宮城からやって来た葛城さんは「受動の文化より、見い出す文化、根づく文化を大事にしたい。小国に来ることはひとつの賭けだったけど、今、とっても満足している」と、生き生きと話してくれた。

葛城さんご一家

岳の湯に小国を見た。

今年、2月、小国の山おこしシンポに出かけた。交通センターも、もちろんいいが、この町で最も魅きつけられたのは、県境にある岳の湯であった。

家の前の畑ならいざ知らず、庭や、家の土台下からも、蒸気が吹き出している。なかなかの景観。

聞けば集落の歴史も古く、それ故か庭先の蒸し湯の湯けむりのにじみが、いかにもそれらしく心にくく思われる。いままで、村人は蒸気を生活の中に巧みにとり入れ、新築の民宿では床暖房に利用しているところもあるという。

最近はみかんの促成や魚の飼育にまで、試行が見られるが、この自然のエネルギーを岳の湯でしかできない独自の方法で利用してみてはどうだろう。

小国杉の振興は、確かに必要であろうが、地域の個性をより浮きぼりにすることが、村興しであるならば、次は他に類を見ないこの岳の湯に、一点重点投資で、新たな悠木の里の物語りづくりを行うのも、面白い。

悠木の里づくりのより一層の推進を願って――。

愛知県足助（あすけ）町 企画課長 小沢 庄一

まだまだ可能性いっぱいのこの町。
日本一の山あいの町〝悠木の里〟は、まさに小国杉のように、
これからもきっとスクスクと
まっすぐに伸びて行くことだろう。